開館 35 周年記念　美術館につとめてみたら　……　①　歴代館長について

埼玉県立近代美術館では現在、多様な専門、経歴、世代の学芸員が活躍しています。35 周年にあたり、当館学芸員の皆さんに、埼玉県立近代美術館の特色やこれからについて語ってもらいました。まずは大越主席学芸主幹に、お仕事を一緒にされてきた歴代館長 (本間正義氏、田中幸人氏、建畠哲氏) について ...。

大越久子主席学芸主幹 (1981 年より勤務)

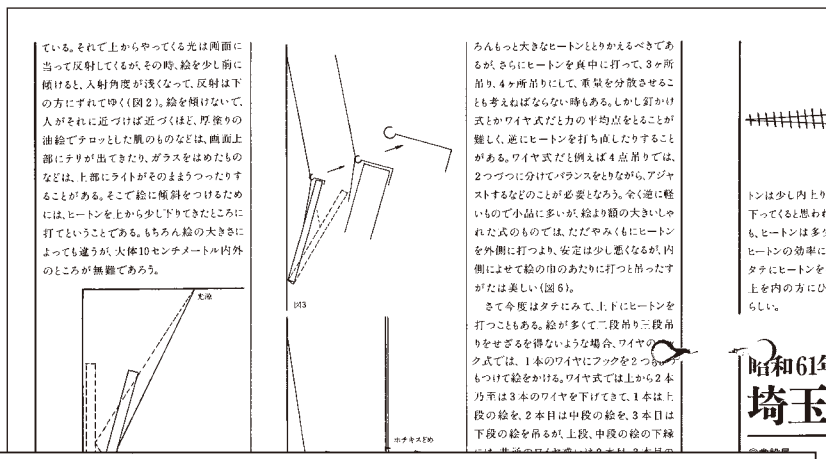
―この美術館の基本路線を作った本間さん。

偉い人だったんですよ。私たちの印象からすると雲の上みたいな。特に私の場合は、美術館が何たるかをよく知らないで就職したものですから、本間さんが決めたことは正しいと。もの申す気持ちはさらさらありませんでした。本間さんは東京・国立近代美術館と大阪・国立国際美術館という大きな２館の立上と運営に関わった方なんです。埼玉の時はそういうことも経て、老後の楽しみみたいなところがあったのではと思うふしもあります。新人学芸員も多かったので、若い奴らと遊びながら育ててやるか的な余裕は垣間見えました。もともととても遊び心のある人だったので、まじめでオーソドックスな考え方をする一方、それを壊したいという悪魔的な自分を楽しむ二面性があった気がします。今まで勤めていた美術館でできなかったことややり残したことを、若い人を焚き付けて企画展にさせたりということもありましたね。

この美術館の基本路線として、コレクションについては埼玉ゆかりの近代美術家、地味であっても美術史上欠かせない人たちを核にして、それと関わった印象派からエコール・ド・パリという枠組を作りました。企画展はそういう枠にとらわれず、広い視野で打っていく、それは何よりも学芸員自身が進歩するために知恵を絞っていかなければいけないからだとおっしゃっていました。『ソカロ』に「美術館物語」を連載していましたが、一般の読者に向けてというより学芸員の教科書のようなもので、「こんな風に美術館をつくっていくんだ」「いろいろなスキルや考え方を身に着けていくべきだ」ということが書かれています。本間さんが作った基本路線は、仕事を共にした世代にとっては、深く心に刻まれています。

メキシコが大好きだった方で、そもそも『ソカロ』自体が鶴の一声で広報紙のタイトルに決まったんです。メキシコ州と埼玉県の姉妹提携がなかったとしても、たぶん埼玉にメキシコ美術を持ち込んだに違いありません。今回のリベラ展開催にあたり、本間さんの影響が今でも生きているなと感じています。

作品を最もいい状態でお客様に提供するための展示作業を大切にしていて、それだけは学芸員に 100%任せることはしませんでした。出張先からでも必ず帰ってくるのを待っていなければならず、ほぼ固まっている展示も総取り替えみたいなこともあって、待っている方は戦々恐々としていましたね。でも、単に壁にかけるだけではない展示手法など、現場で学んだところは一番大きかったと思います。(本間正義館長：1982 年 11 月 -1991 年 4 月)



美術館物語⑦
展示ということ、その2：「ヒートン」
本間正義　埼玉県立近代美術館長

本間館長の「美術館物語」。壁に打ち付けたり吊るしたりする際、絵の裏に取り付ける「ヒートン」の種類や位置について、3 ページにわたり詳細に説明しています。――――現在の形態になる前の初代 ZOCALO #14 から

―田中さんは「なぜ美術館が必要なのか」ということを考えた。

田中さんには、美術評論家・ジャーナリストとして新聞や雑誌に書いていらしたものを読んで、慣習や世俗にまみれない清新な人というイメージを持っていました。彼からすると、美術館というものを外側から批判的に見ていた身でありながら、美術館の内側に入り込んだはじめての経験で、苦労されたことがあったかもしれません。

田中さんは、新聞社で社会問題を扱っていた部署から美術に進んでいきましたから、根っこがいわゆる「美術至上主義」ではなく、それを生みだした人間、生まれた時代や環境というものを深く考える人でした。そこが本間さんとはちょっと違っていたかな。ある意味、泥臭いんだけど、精神的にはとても洗練されていました。人の痛みを想像できない鈍感さを「田舎者」と言ってよく罵倒してましたよ。うかつな一言で私も怒鳴られたことがある（笑）。

収集に関しては、未来の人に伝えていくために、本間さん時代よりもっと視野を広げたコレクションにしていくべきだという思いを強く持っていました。近代に終始して、戦後の数十年が「空白」になってしまう意識を危惧していたんです。戦後に制作された作品、あるいは戦後に生まれ育った若手といった同時代のアートにきちんと目を向けるべきだとたびたび言っていました。私の想像ではありますが、田中さんは敗戦後の激動の時代を生きたということが人間性に関わっていて、時にはこぶしを振り上げざるをえなかった人たちとも、真剣に向き合わなければいけないと考えていたと思います。

本間さんにとって美術館はあって当たり前のものだったけれども、田中さんは「なぜ美術館が必要なのか」ということを粘り強く考えた人。なぜ「美術」と関わるのかは、「我々の問題」だといつも言っていました。生きることとアートに関わることがイコールの重みを持つくらいの覚悟でやれと、たいていは厳しく、ときには優しく迫ってくる方でしたね。学芸員が勉強して積み上げた知識や作品の評価を発信することはもちろん必要だけれども、もっと広く社会に響くような力となって美術館から発信されていく、そういう影響力のあることをやれと言っていたように私は思います。彼は『ソカロ』に「21 世紀へ向けての美術館」という連載をして、そこでも「なぜ美術」問題についてたびたび書いています。それに、「文化行政の貧困さ」のような行政批判もけっこうありました。田中さんだけでなく、『ソカロ』の懐も深かったんですね（笑）。「行政が主導して枠を作った美術館に、大学で美術史しか勉強してこなかった学芸員が入ったって意味ない」みたいなことを平気で言うわけですよ。作品を展示する者たちが、どんなふうにものを根源的に考え、体験する機会を提供できるか。そのことによって何かしら社会生活が楽しくなって、人間が豊かに生きていくうえでの一助に結びつくような、そうした影響力のある重要なものと関わっているということを忘れてはいけないと言われました。この美術館が市民と関わる機会が増えたのには、田中さんの思想が深く影響していたと思います。まいた種は、美術館の外でも育っているかもしれませんね。

飲みながら人と議論するのが好きだったのね（笑）。美術界の動きがどうとかではなくて、もっと本質的な「表現と森羅万象のどちらがすごいか」というような議論を吹っかけて、答えを求めるのではなく、語ることを楽しんだり、場合によってはその人の度量を測っていたんだろうと思うけれど。物事を観察して思索するという姿勢がとても深い人でした。(田中幸人館長：1991 年 5 月 -2000 年 3 月)

ZOCALO 創刊号。初代 ZOCALO 表紙は、毎号 1 つの作品をピックアップしていくスタイルでした。グラフィカル！

―建畠さん。そしてこれからの埼玉県立近代美術館。

建畠さんのことは、お互いに現役なので ...。いろいろな業界にも詳しいわりには、すれてもないけどウブではないというか（笑）。本間さんはいろいろな景色が見えていて余裕があるから、賑やかすようなことを平気で言う。田中さんはとても細やかな気遣いをしつつも、単刀直入に誰彼かまわず正論をぶつける。建畠さんには説明力と社会性があります。

市民社会が成熟しないと良い美術館はできない、そのためにも美術館は外に目を向けていくべきだとおっしゃっています。美術館で扱える時代範囲やジャンルは、20 世紀に比べて格段に広がってますよね。未来に伝えるためのきちんとした収集はもちろん必要だけれども、美術館そのものを大きなメディアとしてとらえて、もっといろいろなものを取り込んでやっていきたいと。学芸員の視野が狭くならないよう、実に様々な情報やアドバイスを提供していただいています。詩人であることは知られていますが、意外と器用で、ご自分でオブジェも作るんですよ。学芸員とアーティストのバランスが絶妙です。詩人として外でどんな顔を見せているのか、とても興味深いところではあります（笑）。

田中さんが館長を退いて建畠さんをお迎えするまでの間に、学芸員の半数が世代交代して、この美術館も変わりつつあります。だからこれからですよね、建畠さんのアイディアはもちろんのこと、さらにその先のリーダーとともに、新しい感性を持った人たちが考えて美術館をかたちにしていくのは。どうしても私たちは引きずっているわけですよ、「本間」とか「田中」とかを。10 年もしないうちに、埼玉は劇的に変身しているかもしれませんね。今はまだ若い学芸員たちが、いろいろなことをかたちにできる力を身に着けて、さらに大きなことを変革していくエネルギーを持てるかどうか。そのころに私がどうしているかわかりませんが、本当に楽しみ。私が見たことのない、この美術館の歴史が始まると思います。(建畠哲館長：2011 年 4 月 -) 聞き手：S.I.

21世紀へ向けての美術館④
都市の頭脳となるために：田中幸人
(埼玉県立近代美術館長)

(1)　震災の恐威に思う

新春早々、阪神を襲った大地震は、自然の思いがけない恐威と近代都市づくりの過去と現在に対して、如何に人間の知恵が浅はかだったかをイヤというほどつきつけた。なかでも近代都市づくりの根幹に加担してきた公共行政、都市プロジェクトチーム、あるいは情報、運輸、道路や土木建築家たちにとって心胆寒からしめるところが想像以上にあったのではなかろうか。刻々と震災の悲猶を伝えるニュースをテレビで見ながら、私はふと、だれかが語っていた「頭脳都市論」の話を思い出していた。藤森照信さんだったか、はっきり記憶していないが、たしか都市の住み方を人体の機能にたとえながら、東京の山手線の内側はわが国の脳ミソにあたる。脳ミソという器管はからだの中でも、その体積の割には酸素や栄養分を猛烈に消費するところで、細胞のひとつひとつは何のためにあるのかはっきりしない無駄な部分がたくさんあるにもかかわらず、きわめて大きな酸素量と栄養分を食ってしまうのだ、という話の主旨だったかと思う。つまり、人体の中で、考える働きをする脳ミソは、計算や経済効率では推し測れないほどの大いなる無駄を必要とするらしく、これからの都市は、考える場として、あるいは情報発信源としてベイしない無駄を上手に配置しないと21世紀の都市としては脳ミソの腐った都市になってしまう、ということだったように記憶している。ニュースを聞きながらそんな話を思い出していたのは、ひょっとしたら、震災の恐怖で私の頭から汚気が出ていたせいかもしれない。もちろん私の脳ミソの中では都市の中の余裕のある空間、公園やアミューズメントなアーバン・デザインの理想像がクルクル回転していたに違いなかった。

震災後、すでにさまざまな努力が払われはじめている。都市再生へ向けての各方面や市民の努力には陰ながら敬意を払い、ささやかな支援もしている積りだが、気がかりなのは、"復興"という錦の御旗のもと、都市再生のハードだけが先行してしまわないかといういちまつの不安感もついついよぎってしまう。60年代の高度成長経済期以来、わが国の都市づくりは、ほとんど無駄という機能を忘れてきているからである。

いったい都市とは何だろう。その究極の目標とは？。単純なことだが、そこに住む人々、男や女や家族やこれから生れてくる子供たちの成長を手助けすることではなかろうかと思う。残念ながらわが国の都市づくりのデザインや開発は、公団住宅ひとつ、公園づくりひとつとっても建物や空間（土地）の経済性だけに目をとられてきた。その土地効率のみの観点こそが都市をみじめでゴタゴタしたものにし、夜間は人気のないゴーストタウン化してしまってきている。どうか都市における建物や空間の最低線がベイ（利潤）だけで測らない人間に基準を合わせた"復興"を願うばかりだ。

(2)　無駄でアミューズメントな空間

公園とか余裕のある空間といっても、さまざまなものが考えられる。できれば、街は歩きまわり、楽しむ者のためにつくられてほしい。眺め楽しみ、歩いているうち、その土地の歴史とか、美しさとか、においとか、子供たちの夢とかが、ソフトに都市住民の中へ分泌していくようなものであってほしい。もちろん、オフィス街やショッピングセンター、あるいは集合住宅地や公園、港湾地区や工場地区など整合されたハード な配置も必要だろう。高速道路、拡幅された道路や電柱のないアーバン・デザインも当然考えられるだろう。横丁や路地や屋台や起伏坂などイレギュラーな都市空間だってもっと至るところにできていいだろう。しかし、今度の震災ばかりは、70～80年代にいわれたような、イレギュラーな横丁や路地がいいとは必ずしも無邪気にいえないことを証明した。要は人間の動態に合わせた配置こそ最も重視されなければならなくなってきた。ソフトが分泌していく街、隠し味のような舌のだ液が分泌する街空間…。脳ミソがうまく回転していく都市―。

例えば、大きな公園と一体となったキッズアートミュージアム（KID'S ART MUSEUM）などは如何なものだろう。いうなれば、子ども科学館か美術館のようなもの。手を触れたり操作したり、自由な遊び感覚、アート感覚を養いながら、探検もし科学的な知識や教養が自然と身につく屋内外の空間、これらをいくつか連鎖させながら街の区割をつくっていく。豪壮な建物はいらない。鉄骨むき出しになった工場ていどのものでよろしい。あるいは街の歴史をしのばせる廃工場や倉などを公園も組み込みながら次々に連鎖させていく街並みの創造。それを縦軸にしながら横軸にはディスコやショッピングや音楽ホール、ギャラリ・・などを包み込んでいくアミューズメントな都市空間、大人も老人も子供も楽しめる街空間である。

これはすでに創設されたエリアだが、アメリカのサンフランシスコにエクスプロラトリューム（EXPLORATORIUM）という子供科学館がある。かの有名な物理学者、オッペンハイマー博士が提唱してつくられ

新宮　晋「月の裏」1994年　さいたま芸術劇場

田中館長の「21 世紀へ向けての美術館」。阪神・淡路大震災の約 2 ヶ月後に発行された ZOCALO で、早くも復興計画について提言しています。――――初代 ZOCALO #50 から

GO BACK TO 1983

この記事を読んだ人はこんな記事も興味がありそうです

開館30年・歴史と想い出のカケラ①
平山都学芸員 (2013 年退職)
伊豆井秀一学芸員 (2015 年退職)
インタビュー
現 ZOCALO #60　2012.6-7 月号

開館30年・歴史と想い出のカケラ②
大久保静雄学芸員 (2013 年退職)
中村誠学芸員 (2017 年退職)
インタビュー
現 ZOCALO #61　2012.8-9 月号

開館30年・歴史と想い出のカケラ③
前山裕司学芸員 (1981 年より勤務)
インタビュー
現 ZOCALO #63　2012.12-2013.1 月号

開館30年・歴史と想い出のカケラ④
松永康さん (2002 年退職)
大越久子学芸員（1981 年より勤務）
インタビュー
現 ZOCALO #64　2013.2-3 月号

建畠館長　開館35周年に語る――
揺さぶる美術館へ
建畠館長 開館 35 周年に語る
揺さぶる美術館へ
現 ZOCALO #83　2017.4-5 月号

指定席券
みなさんの MOMAS 35th
▶あなただけの MOMAS 40th
現 ZOCALO #86　2017.10-11 月号発